

いつでも貴方の背中を押すよ

町田市立真光寺中学校 一年 小林 こばやし
七緒 ななお

私には親友と呼べる友達がいる。

あの子とは、学校も部活も一緒でお揃いのものもたくさん持ってて、休日とかには公園とか遊園地とかに遊びに行ったりとかしちやってき、みんなからも「いつも一緒だね」とか「本当に仲良しだね」とか言われちゃう。

そんな私達は、もちろんお互いに相談とかもするわけで：ほら、例えば最近部活がうまく行かないとか、隣のクラスのあの子とどうしても仲良くなれないとか、英語が嫌いだから英語の代わりに国語が増えればいいのとか、そういうほとんど愚痴みたいなどうでもいい話：ていうか大事な相談ってあったっけ：ああそうそう、あったあった大事な相談。

好きな人の話：恋愛相談ってやつは、私達しか知らない隠し通路からしか入れない屋上の青空の下でひっそりと行われている。

今日の昼休みの会議では、なんと好きな子に告白するというのだ。

あの子の好きな子とは、部活の先輩で、背はそんなに高くないけどとっても優しくって、運動苦手なのに水泳だけはできて、おちゃらけるくせに実は真面目で負けず嫌い。

それで：それで：私の好きな人。

でも、私はあの子を応援する。だって約束したから「いつでも力になる」って。

だから私はいつだって貴方の背中を押してあげられる。

まあ、それは置いて、今日の会議で決まったことは、3つ。

1, 明日告白すること 2, 体育館裏に先輩を呼び出して放課後に告白すること 3, 返事はその場でもらうこと 4, 返事をもらったらずぐに屋上に来ること

あれ：4つあるかな：まあいいか。

夜になって、私はベッドに横になりながら明日告白するあの子のことを考えながら再び背中を押す決心をして、明日に備えて眠りについた。

翌日。

放課後に体育館裏に面する屋上であの子と先輩を見守っている。

本当にこれでいいのかな、あの子に先輩を譲っていいのかな、そんな考えが頭をよぎっては消えていく。

私ったら応援するって、背中を押すって決めたじゃんか。

市長賞
小林七緒「いつでも貴方の背中を押すよ」

なのにまだあきらめられないなんて私でもしかしてひどい親友なのかな。
屋上という特等席でぼんやりと青空を雲が横断する様を見ていると…後ろの隠し通路の方
から息を切らしながらも大声で私の名前を呼ぶあの子の声。
え、なにに、なんでそんなに急いできたの。
どうしたのか聞いてみると、どうやら告白しようと思ったら先輩に先に告白されて、パニ
ックになって逃げてきたらしい。

「何してんのよ、こんなラッキーなことないじゃない。」
口ではそう言いつつも、つくづく幸せな子なのだなあと私はとても微笑ましく思った。
先程まで二人を見守っていたところのフェンスの上にあの子が座る。
どうやら、未だに体育館裏でオロオロしている先輩にOKの返事をしに行きたいが、逃げ
出してきてしまったという事で、少し気まづくなっちゃってこわくなったんだって。
悩んでる親友を見て、今こそ背中を押してあげるときなんじゃないかと思った。
そうと決まれば行動はいたってかんたんだね。
フェンスに私に背を向けるように座ってる彼女の背中に手を添えて、優しさを込めてただ
力強く真下にいる彼のもとへまっすぐ送り出してあげるだけだもん。
私は恋するあの子の、フェンスに座るあの子の…
背中を押してあげた。

審査員講評 *****

何を言ってもネタバレになるため、未読の方はぜひすぐに
でも読んでいただきたい作品です。ショートショートは、ア
イデアがあれば必ずしも不思議な物語である必要はありま
せんが、本作はまさにその「不思議ではないショートショ
ー」のお手本のような作品で、素晴らしいアイデアにうなり
ました。

—— 田丸 雅智